

メディアファイロソフィー

第九回 高慢と不機嫌

高田明典

金持ちで独身の男性は妻を欲しがっているに違いない、というのは誰もが認めている真理——だそうである。では、独身ではあるが金持ちではない若者はどうなのだろうか。いわゆる「失われた世代」の若者たちの多くは、結婚どころの話ではないと聞く。もちろん結婚が必ずしも幸せにつながるものではないということは多くの既婚者が切に実感しているはずだが、選択肢がきちんと用意されているということは重要である。現代の若者の選択肢は、多くの部分で封鎖されてしまっている。この社会が、制度として派遣社員や短期契約社員を容認すれば、正規雇用の社員が少なくなるのは当然の帰結だろうし、大学を卒業したのち、さらに初年度の学費が百五十万円（国立大でも約百万円）もかかる法科大学院を卒業しなければ法律職に就けないということになれば、そこそ豊かである層しかそれを選べないことになるのは当たり前のことだ。そういう「仕組み」を決めた人たちは、この国をどうしたいのだろう——まさか壊そうと思っているわけではなからうが、良かれと思つてやっているのであれば、まさに救い難い。

選択肢を封鎖してしまうのは、多くの場合、先に生れた者たちである。そして言い訳がましく狭い門をいくつかに開けておき、「この門をくぐりぬげられないのは、君の力不足のせいだよ」と言う——くぐりぬげたからといって天国が待っているわけでもないのにな。

だから若者は、ときとしてそのような社会に反感を抱き、反社会的な言動に魅力を感じたり、自らそのような言動を繰り返したりもする。それは決して悪いことではなく、若者のそのような言動が適度な振動を発生させ、それによって社会がより健全な状態へと変化するための力が形成されることもある。端的に言えば、従順な若者というのは、社会にとつては毒にも薬にもならない——もちろん、私自身そのような「かなり従順なほうの若者」として青年時代を送ってきたので、それも悪いとは思わないが。

沢尻エリカという女優たかタレントだかが映画の初日舞台挨拶でとつた不機嫌な態度が物議を醸したが、あれを「高慢さの表れ」と考えるのは誤りである。心理学者のローゼンツヴァイクは、人間の欲求不満耐性は年齢や経験によって強くなると指摘した^四。簡単に言えば、年かさが増え、辛いことを多く経験すると、欲求不満に耐える力が増加するということだ。

もちろん、不満に耐えるということが常に推奨されるわけではないが、欲求不満が発生した場合には、その状態をどうにかすることを考える必要がある。そのためには不満を一時棚上げしつつ有効な手段を模索しなければならぬ。欲求不満に耐えることができなければ、有効な手段を考案したり実行したりすることも支障が生じる。

つまり、子供は不満に耐えられずにそれをすぐに表明するが、大人は不満に耐えつつも、それを解決するための

一 ジェーン・オースティン（著）富田彬（訳）『高慢と偏見』冒頭より。「相当の財産をもっている独身の男なら、きつと奥さんをほしがっているにちがいないということには、世界のどこへ行っても通る真理である。」（『高慢と偏見』上巻）九頁。）

二 「自己責任」という単語は重要であるし、必要な概念であるとも思うが、多くの場合は政権担当者や指導者や管理監督者の責任回避のために使われる。

三 二〇〇七年九月二九日、主演映画「クローズド・ノート」の舞台挨拶で、「いちばん思い入れのあるシーンというのは、どのシーンでしょうか」という司会者の質問に対して「特にないです」と答え、さらにその後、スタッフのためにクッキーを焼いたことを紹介され、「どんな思いでクッキーを焼いたのかだけ、ちょっと教えてもらえますか」と問われて、「別に」と答えたことが芸能番組などで取り上げられ、バッシングされた。

四 サウル・ローゼンツヴァイク (Rosenzweig, Saul) 「プラスチック・シジョン耐性」という概念の提唱者。P-F スタディ (絵画欲求不満テスト) の開発者としても知られる。

行動を開始するということである。この「子供と大人」の中間地点にいる人間が使うのが「不機嫌」である。

不満に耐えようとはしているものの、それが態度に出てしまう。しかし問題の解決に向けて前向きな努力をとることはない。こういう行動が大人になっても残存するのは、その行動が有効だったという経験に由来している。つまり、不機嫌な態度をとることによって周囲が気を遣い、代理で問題を解決することが繰り返されてきたとき、そのような行動が「戦略」として残存する——これも簡単に言えば、「ちやほやされてきた」ということになってしまうのだが。

泣けば問題が解決するという環境の中で生きていけば、「泣く」という行動が有効な戦略として残存するし、叱られてもじつと無言で耐えていれば解決するという環境では、「無言」という戦略は有効なものとして残る——エイブルソンの「認知的スクリプト理論」^五である。

「不機嫌」が、有効な戦略として多くの若者の中に残存しているとまでは言えないが、昔に比べれば随分と不機嫌な若者が増えたようにも感じられる。それは、彼らにおいて多くの可能性が封鎖されてきたことと無関係ではない。私たちのこの社会は、高慢な若者を減らし、不機嫌な若者を増やす方向へと進んでいるようだ。

大口をたたく無礼と、不機嫌な態度をとる無礼との間には、本質的な違いがある。不機嫌とは、不満を持ちつつもそれをあからさまに表明することをせず（つまり言葉にせず）、態度で表すことを言う。それはむしろ大口や高慢さの対極に位置するものであると言える。どうして彼らが明確に不満を言葉にしないのかというと、それは、端的に「言えない」もしくは「言っても理解されない」「言っても無駄」と感じているからである。たとえ言ったとしても改善される見込みはなく、自分の側に非があることを指摘されるだけだからだ。だから態度でのみ表し、周囲が解決のために勝手に動くことを期待することになる。

無礼であるか否かは、その行動を見た人間が判断することであるから、不機嫌も高慢も同じく無礼であると判断される場合があるが、大口や高慢さが主として言葉を用いて行われるものであるのに対して、不機嫌は言葉を用いずに態度や表情で示されるという点からも、それはわかる。

また、不機嫌は高慢さの表れではない。高慢な人間は、どちらかと言えば上機嫌である。高慢な人間は自分の能力と可能性を確信しているが、その逆に、自分の能力も可能性も信じていることのできない人間が不機嫌という戦略をとる。少し考えればわかることだが、その場所に「いつづけなければならない立場」であるから不機嫌になるのであつて、高慢な人間は席を立つてしまふ^六——それも「無礼」な行動には変わりないが。

だから不機嫌は、つねに弱者の武器であり、子供から大人になる過程の中間的な立場にあるものがとる典型的な態度である。問題解決のために有効と思われる努力をしているとき、人は決して不機嫌にはならない。また、「自分の思い通りにならない」だけでは、人は不機嫌にはならない。人が不機嫌になるのは、問題解決のための方法が封鎖されているときである。王の不機嫌とは、弱者となった王の、せめてもの反抗心の表れでしかない。自分が不機嫌となったときのことを思い出してみれば、その事情をよく実感できるはずである。

「上機嫌とは、社交界において人が身にまとうことのできる最上級の装身具である」^七とは、十九世紀の英国の作家サッカレー^八の言葉であるが、よい言葉であるとは思ふものの、この意味を取り違えてはならない。「社交界(原

^五 Abelson, Robert 1976 "Script Processing in Attitude Formation and Decision Making," in *Cognition and Social Behavior*, ed. John S. Carroll and John W. Payne, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 有名人。この「認知的スクリプト理論」と表記しているが、日本では単に「スクリプト理論」と訳されることも多い。

^六 たとえば前述の沢尻エリカの場合、彼女は「舞台挨拶に出ること」から逃れられなかったわけであり、その意味では「高慢」なわけではない。本当に高慢なら、帰ってしまったらいい。

^七 "Good humor is one of the best articles of dress one can wear in society."

^八 ウィリアム・メイクピース・サッカレー (Thackeray, William Makepeace). 十九世紀の英国の小説家。『虚栄の市』(Vanity Fair) 有名人。ただ、これは、上流階級を批判する内容の小説。

文では *society*」とは、富裕層や支配階層の付き合いの場所を意味している。これは、ブルデュー^九の概念であるプラティーク（慣習行動）^{一〇}の一例示である——彼らは上機嫌であり高慢である。それが装身具となるのは、上機嫌という態度そのものによるのではなく、それを示すことよって「力を所有していること」が意味されるからである。少し大きなパーティーなどに行ってみれば誰でも感じることだが、最も大きな力を有している人間が、最も上機嫌である。それを下世話な表現では「でかい顔をしている」とも言う。だからそういう場所では、「弱者」である私はいつも不機嫌になってしまうので、極力出ないように努めているわけだ——途中で席を立つ勇氣も力もないからね^二。

ブルデューは、社会の慣性力をハビトゥス^三という概念を使って説明する。その著書『ディスタンクシオン』^三の訳者である石井洋二郎の用語説明によれば、ハビトゥスとは「もろもろの性向の体系として、ある階級・集団に特有の行動・知覚様式を生産する規範システム。」だとされる。ある階級や共同体で育った人間は、その階級や共同体特有の慣習行動をとる。礼儀正しくするというのも一つの慣習行動であり、また、人に機嫌よく接したり愛嬌を振りまいたりするのも、慣習行動である。一般にそれらは、富裕層や支配階層に位置する者たちがとる慣習行動であり、そのような行動をとるか否かで、「同じ階級や共同体に属しているか否か」を判断することさえする。その慣習行動を発生させる元となる規範が、ハビトゥスと呼ばれる。そしてそれらの慣習行動によつて、社会の構造は維持されていく。

「不機嫌」という慣習行動によつて、どのような社会の構造が維持されることになるのかを考えると、すこしずつとする。可能性を封鎖された人間たちは、不機嫌によつて、まさに自分のその立場を維持していく。沢尻エリカという若い女性の今後の動向にまったく興味も関心もないが、そのあからさまな事例となるのであれば、少し可哀想だとも思う。

大口をたたいたり、無礼であつたり、（実態を伴わないという意味での）空疎な高慢さを示す若者は、過去のどの時代にも、どんな場所にも見る事ができた。だからそれ自体は特に問題視するようなことではないし、（無礼なのは願ひ下げだが）大口や高慢さはむしろ必要なものであるとさえ感じる。問題なのは、彼らのそのような態度自体を売り物にし、自らの利益のための道具として利用した「大人」がいたことこのほうである。それは、亀田一家^四とやらを誉めそやし、番組でことさらに取り上げることによつて視聴率を稼いできた放送局であり、また、沢尻エリカの「女王様キャラ」をおもしろがり、映画やCMに登用してきた企業である。

彼らの無礼で空疎な高慢さ自体が商品であるのだから、それを指摘したり指弾したりする者は周囲には存在せず、当然彼らは増長する。自我は肥大化し、実態の伴わない万能感が彼らを支配するようになり、最後には、行き過ぎた言動に出る。その瞬間に「梯子をはずされた」かのように崩れ落ちる。そして「堕ちた偶像」をさらに利益のネ

^九ピエール・ブルデュー (Bourdieu, Pierre)：フランスの思想家・社会学者。

^{一〇}プラティーク (pratique)：^二ニでは「慣習行動」と訳しているが、私たちが日常的に行うような様々な「決まりきった」行為の^一一だ。

^二だから沢尻エリカと同様に不機嫌になってしまって、周りからさぞかし白い目で見られているんだろうなあ。

^三ハビトゥス (habitus)：プラティークと混同されやすい概念だが、プラティークが個々の行動を示すのに対して、ハビトゥスは「慣習の全体」を示す。つまり、上流階級であれば上流階級の「ハビトゥス」が修得されている。そのハビトゥスによつて、一つの行動としての「プラティーク」が出現するという構図。

^{三三}ピエール・ブルデュー (著) 石井洋二郎 (訳) 『ディスタンクシオン』(I・II) 藤原書店 一九九〇。仏語でも英語でもスペルは“distinction”つまり「区別」「識別」。で、この書名では「階層による差異化」を意味する。

^四ボクシングの人。

タとするハイエナのような輩も発生する始末となる——この話題で原稿を書いている私自身もその一人なのだが
一五。

社会と個人とは、常にある種の緊張状態にある。共同体は、ある規範を個人に押し付けることによって成立するという側面を持っており、個人はそのような規範の押し付けを束縛であると感ずるからだ。それが「よい緊張状態」にあるとき社会は振動し、微調整されながらもより好ましいものへと変化していく。しかし実はそれほどうまくいくわけではない。というよりもむしろ、社会には慣性力が存在し、ひとたび方向性が定まるとそれを維持しようとする力となる——つまり、なかなか世の中は変わらない、ということ。

アガンベン^{一六}はその著書『人権の彼方に』（原題は『目的のない手段』）において、人間とは見られ理解されるために自らを（顔を）露出している存在であり、さらにその露出自体を認識として自らの内部にとりこもうとする存在であると指摘する。また、顔は「啓示のパトス」であり、「言語活動のパトス」であると言う。ここで「啓示」とは「開かれ、示されている」という意味で使われており、また「パトス」とは、「ロゴス（言葉・論理）——パトス（感情・情念）」の対概念の一方として使われている。アガンベンは以下のように続ける。「言葉によって露出されあはかれているということ、秘密を持つことの不可能性のなかに自らを覆うということが、顔の中に、貞節としてあるいは動揺として、無礼さとしてあるいは慎みとして、ちらりと姿を現す。」^{一七}

私たちは、喜び、悲しみ、笑い、ときに怒ったりもする。しかしこれらの状態が「喜び」や「悲しみ」などという語によって捕捉され理解された瞬間に、その語によっては捕捉されえない何かがこぼれおちる。貞節、動揺、無礼、慎み、でさえ言語による認識を示している。顔に慎みが見られると認識された瞬間に、そうではないものが「慎み」という概念からこぼれ落ちる。ロゴスによっては汲み尽くすことのできない「何か」は、滞留し、顔がそれを引き受ける。しかし顔が引き受けるのは、汲み尽くせなかった表現の補完なのではなく、こぼれおちたものさへ露出されるといふ事実である。

自らへの言及に対して「別に……」とにべもない返答をし、不機嫌な態度をとったとしても、それ自体が露出されている。繰り返しになるが、「不機嫌」という概念で認識された瞬間に、そこには「不機嫌」という概念では捕捉されえないもの」が露出する。

すべての人間は、その意味で「秘密を持つことの不可能性」の只中に存在している。「私は露出されている」「私は何も隠せない」ということ自体を露出することによって、「何か」を隠そうとする。しかしその試みは常に失敗する。私たちは、この「どうしようもない露出」もしくは「開け」の中に、隠れようとしながら生きていく——「露出の中に隠れる」という離れ業を要求されている。

十八世紀から十九世紀にかけての英国の作家オースティンの小説である『高慢と偏見』では、富裕で才気溢れる若者の高慢さが、一人の女性の偏見を醸成するが、後にその誤解は解け、二人は幸福な結婚をする。誤解が解けるという言い方は実は正しくなく、「無礼な高慢さ」として捕捉されたものからこぼれ落ちた何か、別の認識を構築したということではない。そしてそれさえも実は誤解であるかも知れないからだ——結婚をすると、そういうことは実によく見えてきたりもするのだが、それについては個人的な事情で多くを語れない。

視聴者やファンとの間の橋渡しをしてくれた映画や番組のスタッフ・共演者たちに対して感謝の念をいっていないなかつたということの「どうしようもない露出」が、もしかしたら一人の前途有望な女優の未来を封鎖してしまふことになるかも知れない——それを「自業自得」と呼ぶのは、少し悲しい。

（初出 『文學界』二〇〇八年二月号）

一五 まあそういうこと言いついたら元も子もないけど。

一六 ジョルジョ・アガンベン（Agamben, Giorgio）、イタリヤの哲学者。

一七 ジョルジョ・アガンベン（著）高橋和巳（訳）『人権の彼方に 政治哲学ノート』以文社 二〇〇〇、九六頁